

2025年度日本魚類学会 学会賞（日本魚類学会賞、日本魚類学会奨励賞および日本魚類学会論文賞）の選考経緯と理由について

学会賞選考委員会委員長 山口敦子

2024年6月24日に、京都市内において学会賞選考委員会を開催した。公平かつ慎重な審議の結果、日本魚類学会賞候補には林公義氏（宮内庁上皇職）を、奨励賞候補には藤原恭司氏（日本学術振興会）を、論文賞候補には以下の2編を選出した。

- Suzuki, H., and Kimura, S. (2024) Taxonomic revision of the genus *Equulites* Fowler 1904 (Acanthuriformes: Leiognathidae). Ichthyol Res 71, 213–259.
- 馬渕浩司ほか. (2023) 琵琶湖沿岸におけるホンモロコ産着卵の分布：野外および文献調査に基づく最近80年の歴史的変遷. 魚雑 70: 1–20.

以下それぞれの賞候補について、その審査過程と選考理由を記す。

I. 日本魚類学会賞候補

日本魚類学会賞候補には1名の応募があった。応募者である林公義氏は横須賀市自然・人文博物館の学芸員として、日本産テンジクダイ科やハゼ科魚類の多様性、国内各地の魚類相など、長年幅広い魚類学の研究に従事した。特に一般市民を対象とした魚類学の研究や教育の普及・啓発に多岐にわたる顕著な貢献をしてきた。また、日本魚類学会の運営にも長年携わり多大な貢献をした。これまでの実績により、日本魚類学会の発展に大きく寄与したことは明らかであり、全会一致で林公義氏を日本魚類学会賞候補とすることを決定した。

林公義氏（宮内庁上皇職）の選考理由

林公義氏は、1969年から1998年にかけて横須賀市自然・人文博物館の学芸員として魚類学研究に従事し、その後は副館長、館長を歴任した。また、1970年以降は複数の大学で博物館学の講義を担当して学生の指導にも尽力した。現在は宮内庁上皇職を務めている。

これまでに発表した原著論文は59編（うち査読付き論文は12編）であり、そのうち6編は日本魚類学会の雑誌（魚類学雑誌、The Japanese Journal of Ichthyology、Ichthyological Research）に掲載されている。魚類学や稚魚関連の学術的な図鑑は8件、教育普及に貢献する魚類の採集、自然観察、標本作成や展示などに関する著作としては35件、また、一般市民や子供に向けた解説や図鑑などの著書が28件ある。研究活動では、淡水魚や日本産テンジクダイ科、ハゼ科魚類の多様性に軸を置きつつ、三浦半島や相模湾、さらには八重山諸島

や奄美群島の魚類相調査を行い、膨大な魚類標本を収集し撮影を行ってきた。これらの標本群は現在、日本を代表するコレクションとして多くの研究者に活用されている。

林氏は博物館での活動と並行して環境省や国土交通省、地方自治体の数多くの審議会委員等を務め、生物多様性や自然環境の保全推進にも尽力してきた。日本魚類学会の会計幹事や評議員、魚類学会史委員会委員長、第9回インド・太平洋魚類国際会議（IPFC9）の組織委員会副委員長など、学会や国際魚類会議運営に対する貢献度も大きい。

林氏の功績の中でも特筆すべきは、各種メディア等を通じた教育普及活動により、研究者や大学生のみならず一般市民や子供たちに対しても魚類や生物多様性、そして魚の水中観察の魅力などを広く伝えてきたことである。2003年に初版が出版された「ハゼガイドブック」は専門者と一般書の両面をあわせもっており、多くの人の好評を博し、重版が繰り返されたうえ改訂版も出版された。NHKラジオ「子ども科学電話相談」では1988年から現在までレギュラー相談員を務め、子供たちからの多岐にわたる鋭い質問に対し、幅広い知識に基づき高度な内容を分かりやすく伝えることで魚類学の裾野を広げてきた。林氏の多岐にわたる業績は、魚類学会員や博物館学芸員、さらに研究者を目指す多くの若者にとって模範となり、彼らの成長に多大な影響を与えてきた。なお、これまでの活動が認められ、環境省より2003年度自然環境功労者環境大臣賞を受賞している。

上述のとおり、林氏の長年にわたる魚類学の研究教育・普及啓発ならびに学会運営への多大な貢献は顕著であり、日本魚類学会の発展に大きく寄与したものと認められる。以上のことより、委員会は林氏が今年度の日本魚類学会賞候補に相応しい研究者であるとして選考した。

2. 日本魚類学会奨励賞候補

奨励賞候補には1名の応募があった。応募者は募集要件を満たしていること、研究分野において顕著な業績をあげていることを確認した。そこで、応募者の研究のインパクトと独創性、国際誌への掲載論文数と質、社会・教育活動での貢献、本学会での活動状況、将来性等を基準に評価を行った。その結果、応募者の論文の数、代表論文の独創性、研究分野の幅、社会・教育活動や日本魚類学会への貢献についていずれも認められ、藤原恭司氏を奨励賞候補とすることを全会一致で決定した。

藤原恭司氏の選考理由

藤原恭司氏は現在、日本学術振興会特別研究員 PD として国立科学博物館に所属している。藤原氏はウバウオ科を中心とした小型底生魚類の分類学や生物地理学の研究に取り組み、ウバウオ科では3新属 10新種、さらにハゼ科などの3科で9新種を記載するなど、これまでに公表した論文総数は73編、そのうち査読付き論文は51編、またそのうちの42編が筆頭著者である。国際誌は33編あり、*Ichthyological Research* にも11編が掲載され。

ている。また、図鑑をはじめとする著書は 9 冊ある。

藤原氏は、鹿児島大学在学時から現在に至るまでウバウオ科を中心とする小型底生魚類を対象とした分類・系統学的研究を行ってきた。ウバウオ科は腹部に吸盤構造をもち、それを用いて様々な基質に吸着する。藤原氏は、ミサキウバウオ属を 4 属に分けたことにより、本科の吸着生態は、属レベルで異なること、一部の吸着生態は収斂的に獲得されたことを明らかにした。これらの吸盤構造が特殊化した生態・形態の進化的背景を明らかにすることに意義がある一方、観察には技術や経験を有することなどから分類学的研究が十分には進んでこなかった。藤原氏の研究は、これらを克服するため、分類・系統学の分野で従来から用いられてきた手法を使いつつも、マイクロ CT スキャンを用いた観察や高性能マクロレンズ・深度合成技術による微小な形態の高精細な撮影・観察など、近年になって可能となった観察手法を取り入れていることが特色である。このように伝統的な手法をベースにしつつ先進的な手法も織り込んだ論文は、世界的にも未だ数少なく、小型底生魚類を扱った分類・系統学分野における今後の研究手法の指針となり得ることが期待される。

一方で、藤原氏は奄美群島喜界島の魚類相を多くの初記録種とともに明らかにし、そのポスターの作成や無料配布を行うことで地域貢献に努めている。また日本魚類学会では、2021 年の年会で「日本産ウバウオ科魚類の分類学的再検討」により優秀発表賞を受賞しており、今後の研究の進展と学会への貢献が期待される。

以上のように、藤原氏は小型底生魚類の研究を通じて魚類学の発展に寄与していること、また今後の更なる発展と貢献が期待されることから、委員会では、藤原氏が今年度の魚類学会奨励賞候補に相応しい研究者であるとして選考した。

III. 日本魚類学会論文賞候補

論文賞については、自薦および編集委員会推薦による 9 編を対象に選考した。これらの論文について、研究論文としての完成度、研究方法や内容の斬新さ、各専門分野と魚類学の発展への貢献度などを基準に評価を行った。選定の第 1 段階として、各委員が自身の推薦する論文 2 編とその推薦理由を述べた。その結果から、特に得票数や評価の高かった 3 編を中心に十分に議論を尽くし、過去の各年度の論文賞の数を考慮した上で分野の偏りがないことを確認し、最終的には候補にあがった 3 編のうちの 2 編を全会一致で論文賞の候補論文として決定した。以下に、各論文が高く評価された理由を記す。

- Suzuki, H., and Kimura, S. (2024) Taxonomic revision of the genus *Equulites* Fowler 1904 (Acanthuriformes: Leiognathidae). *Ichthyol Res* 71, 213–259.

本論文は、インド・西太平洋の様々な海域から採集された多数のヒイラギ属標本を形態学的調査と mtDNA の分子系統解析に基づき網羅的に再検討し、2 新種を含む 10 種に整理したモノグラフである。各名義種のタイプ標本を丹念に調査し、多数の一般標本を観察した上で

分類形質を明示した意義は大きく、種の検索表は、分類学のみならず生態学など他分野の研究においても広く活用されることが期待され、論文賞候補に相応しい論文であるとして選考された。

- 馬渕浩司ほか. (2023) 琵琶湖沿岸におけるホンモロコ産着卵の分布：野外および文献調査に基づく最近 80 年の歴史的変遷. 魚雑 70: 1–20.

琵琶湖沿岸におけるホンモロコの現在の分布状況を頑健な手法で把握し、過去の状況は文献調査によることで、いずれも緻密な調査により 80 年の歴史的変遷を整理した論文である。湖畔の各エリアの環境変化が丁寧に記述されており、独創性も認められる。本論文は、今後のホンモロコ研究の重要な基礎資料となるだけでなく、日本の魚類学の発展に貢献することが期待される。比較的引用数が多く、国内のみならず、国際誌から引用されている点も評価され、論文賞候補に相応しい論文であるとして選考された。